

せい こん か
誓言嫁

クリムゾン・ヴァンパイア

夏目 翠

Sui Natsume

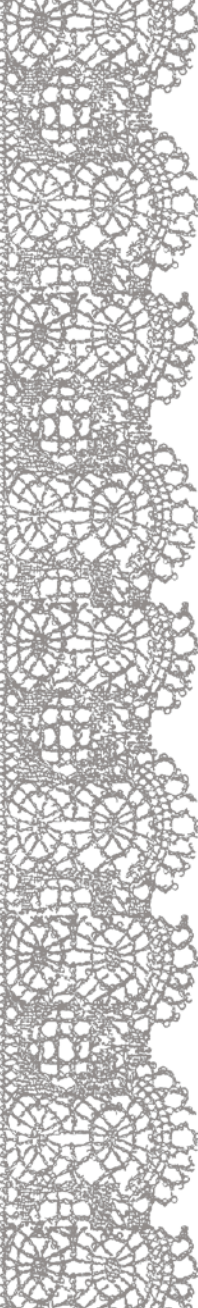
立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 直江まりも



目 次

序章	知りたくなかった現実	7
第一章	初恋に酔いしれる	20
第二章	仲塚原本家の人々	54
第三章	血縁という呪い	74
第四章	重なる事件	100
第五章	蜃気楼の下	126
第六章	愛情に飢えた者	147
第七章	頬を伝う涙	175
断章	遠き夜の約束	194
第八章	混成種吸血鬼	196
第九章	裏で糸を操る者	211
第十章	隠されていた真実	229
第十一章	過去と真実の向こう側	248
第十二章	月下誓約	268
第十三章	吸血鬼の花嫁	283
終章	運命が決まるとき	302
	あとがき	312

登場人物 紹介



きつ か
橘香

母を亡くし、^{なかつかはら}仲塚原別邸で
世話になる少女



アレク

仲塚原別邸の主



めい た ろう
明太郎

アレクに仕える別邸の執事



ゆう な
由那

^{あき な}別邸のメイド。明那の母



ひじり
聖

アレクに仕える青年。別名 ^{かげもり}“影守”

せい こん が
誓 言 嫁

クリムゾン・ヴァンパイア



序章

知りたくなかった現実



十一月も終わりにになると空気は乾き、風は日ごとに冷たさを増す。冬至とうじに向けて、日暮れは早くなくていく。

郡上ぐじょう橘香なかつかはらが仲塚原市にやって来たのは、七月下旬だった。当時のうだるような暑さはどこへやら、今はその気配の欠片かけらさえ感じられない。

しかし、冬になつてもなお、暑さで頭をやられてしまったかのような発言をする者もいる。

「体を調べさせてくれないか」

「……はあ？」

他人から言われて、これほどいいかわしい台詞せりふはないが、言った本人は至極当然という態度だった。

橘香がいるのは、仲塚原市で一番大きな総合病院で、世界に誇る大企業の創業家である仲塚原家の資本で運営されている。

病気でもない自分が学校帰りに連れて来られただけでなく不思議なのに、その上この台詞である。橘香は混乱こんらんしきっていた。

「えっと……あの、わたしのですか？」

とりあえず落ち着こうと、止まっていた息を意識して大きく吐き出した。少し力が抜ける。

「もちろん。他に誰がいる」

そう言つて頷くのは無精髭にボサボサ頭の、白衣を着た男だった。名前は仲塚原良継よしつぐという。古くからこの街を支配する仲塚原家現当主の長男が、橘香の両肩をつかんで言った。

「お嬢ちゃんにしか頼めないんだ」

「えっと、でも」

「頼む」

頭まで下げられてしまい、せつかく収まりかけた混乱がぶり返す。

「良継さま、それではただの怪しい人ですよ」

こほん、という咳払いと共に良継を止めてくれたのは、聖ひじりという青年だった。一見すると、十七歳の橘香とさほど変わらないようだが、既に成人している。眼鏡で童顔を隠しているが、あまり効果はない。

「そうか？」

たしな
窘められて、良継は不満そうに眉根を寄せる。

「とりあえず、橘香さんの肩から手をお放しください」

「悪い」

ようやく解放されて、橘香はほっと息を吐く。

「熱意が先走りして、空回りした挙句、気持ち悪がられる典型例ですね」

「影守かげもりは厳しいな」

影守、というのは仲塚原家の面々が使う聖の呼称だった。

呆あきれられても、良継に諦めるといふ言葉はない。

「だがな、こんなチャンスは滅多にないんだぞ？」

「だからといって、無理強いはいけません」

放っておいたらいつまでも続きそうな言い合いを橘香が遮る。

「あの……それで、わたしは何のために呼ばれたんでしょう？」

「影守^グ から聞いてなかったのか？」

良継は既に話を通じているものだと思っていたらしい。「何をしている」と視線でとがめられても、当の聖は涼しい顔をしている。

「良継さまがお話しになるべきかと思ひまして」

「それもそうか」

あつさりと頷いて、良継は橘香に向き直る。

「お嬢ちゃんがアレの^グ花嫁^グ となつて三ヶ月以上経^たつたからな。体の状態を調べたいんだ」

良継が言う「アレ」とは、仲塚原家が祀^{まつ}る家神

——アレクのことだ。彼はこの地上で最後に残^{ビュアリディ}つた純血種^{ヴァンパイア}の吸血鬼で、橘香は何の因果か、その花嫁に選ばれてしまったのだ。

花嫁と聞けば聞こえはいいが、要は安定的に血液を供給する餌だ。アレクは、被食者と契約をしなれば血を飲むことができない特異体質だった。しかし、仲塚原が「花嫁制度」を作った理由はそれだけではない。この現代社会において、外で食^い事^じされた

ら、あつという間に大騒ぎになつてしまふ。そこで、仲塚原家が匿^{かま}う代わりに、娘を一人差し出すことになつたのが始まりだそうだ。

「調べると言われても……」

いったい何をされるのか予想もつかず、橘香は身を守るように自分の体を抱きしめる。橘香の警戒を感じ取つた良継は、慌てて言葉を補つた。

「何も裸になれと言^いうわけじゃない。簡単な問診と血液検査だけだ」

「それだけなら、まあ……」

渋々承諾すると、良継は嬉^{うれ}しそうに口元^{くちもと}を綻^{ほころ}ばせた。いそいそと採血の準備をする。

「悪いなあ。すぐに済むから。あ、腕出してくれるか？」

言われた通り、橘香は左の袖を捲^{まく}り上げた。消毒用アルコールを塗られて、ひやりと肌^{あわだ}が粟^{あわ}立つ。

「ちよつとちくつとするぞー」

「っ」

鋭い針が皮膚に突き刺さるのを見て咄嗟に顔をしかめたが、予想していた痛みはなかった。

赤い血が注射器に吸い込まれていくのをぼんやりと見ているうちに、針が引き抜かれる。脱脂綿を当てられ、押さえておくように言われた。

橘香が手際によさに感心していると、視線を感じたのか、良継が顔を上げる。

「ん？ 痛かったか？」

「いえ……その、お上手ですね」

普通ならあるはずの痛みがないことに感心していると、良継は何でもないように笑った。

「お嬢ちゃんの血管のおかげだな。太いし、若いから血管壁が柔らかくて針が刺さりやすい。さすが、アレに気に入られただけはある」

「……………」

おそらく褒めているのだろうが、褒められている気がしないのはどうしてだろう。

無言で袖を直していると、良継はそのまま話し続

ける。

「本当はアレの血を調べたいんだが、最近、めつきり採血させてもらえなくてなあ」

わざとらしく溜め息を吐く良継の前で、聖が軽く咳払いをした。

「差し出がましいことを申し上げますが、良継さまがあまりにもしつこいからではないでしょうか」

「失礼だな。何も腹をかつさばいて、内臓を見せろと言ってるわけじゃないんだ」

「過去にはおっしゃったではありませんか」

橘香はぎょっとして良継を見た。信じられないことだが、事実らしい。良継は気まずそうに視線を逸らした。

「いや、だって……動いている胃や腸を見るなんて滅多にない機会だし。とにかく、血ぐらい構わないだろうがっ」

拳を握って力説するのは訳がある。

アレクの外見は人間と大して変わらないが、内臓

はまったく違っている。それに、人とは比較にならない高い身体能力を備え、爪や牙を自在に伸ばすことができるのだ。

「おまえはアレの血液を見たことがあるか!? あの成分構成は驚異だ。赤血球や白血球、血小板の数が多い上に、人のものとは形も違っているんだ。一度に多量の酸素を全身に取り込むことによって、あの驚異的な治癒力が……」

その後もひたすら、血液についての熱弁が続いた。世界的大企業を経営する仲塚原本家の長男に生まれながら、実業の世界にまったく興味を示さず、医者になっただけはある。良継はかなりの変人だった。
ヴァンパイア
「吸血鬼の血液を解明できれば、再生医療の研究が飛躍的に進むことは間違いない!」

両手を掲げて、夢を語る。そんな良継を横目で見ながら、聖は心底呆れた顔で肩をすくめた。

「そんなマニアックな話をされても、同意は得られませんよ。だいたい、吸血鬼^{ヴァンパイア}の血なんてどうやって

実用化に持っていく気ですか」

「うるさい。おまえには夢とロマンがわからないのか」

「わかりたくもありませんね」

熱弁をしれつと流す聖を無視して、良継が橘香に向き直る。

「仕方がないから、お嬢ちゃんに頼んだわけだ。

吸血鬼^{ヴァンパイア}の花嫁の血液サンプルなんて、今までなかったからな!」

「……どうしてないんですか?」

仲塚原ならデータにして持っているのではと問えば、良継が胸を張る。

「私のような血液オタクがいなかったからだ」

「……………」

自身の欲求に正直すぎる良継に、橘香は無言になる。代わりに、聖が口を開いた。

「一応、確認させていただきますが、アレクさまにこのことは……?」

「言うわけないだろ。おまえも黙っているよ」

まるで悪巧みをする子どものような物言いに、聖は嘆息する。

「……それは無理な相談かと。そもそも僕が言わずとも、気づかれますよ。聞かれたら、答えないわけにはいきませんし」

「頭のかたい奴やつだな。いいから黙っておけ。……そうそう、お嬢ちゃん。体の調子はどうだ？」

「どうって……？」

質問の意図がわからずに橘香が小首をかしげると、良継が言葉を補った。

「疲れやすくなったりしないか？ ふらついたりとか」

血を吸われていることで起こる貧血を心配しているらしい。

「大丈夫ですよ。食事については、明太郎めいたろうさんが気をつけてくれていますし」

「確かに、郡上の飯はうまいわな」

良継が笑った。明太郎が作る料理はきちんと出汁だしを取った和食中心で、塩分と糖分を控えた野菜たっぷりの食事のおかげで、橘香は以前よりも体調がいくらいだ。

「今はどのくらいの頻度で吸血されている？」

「一週間から十日に一度くらいです」

たまに気まぐれで続くことはあるが、一回の量はそう多くない。吸われすぎて貧血を起こしたのは、最初の一回だけだ。

橘香の話聞きながら、良継が「ふむ」と顎あごを撫なでる。

「血液検査の結果を見ないと何とも言えないが、貧血の症状はなさそうだな。花嫁になってから何か変化を感じたことはあるか？」

「変化——？」

「良兄よしにいさま！」

勢いよく開かれた扉の音に驚いて、橘香は言葉を飲み込んで振り返る。

入り口には仲塚原^{たまき}珠希が立っていた。前に顔を合わせたときに比べれば髪は多少伸びたとはいえ、かなりのベリーショートは変わらずだ。顔立ちは整っているが、吊り目のせいで、きつく見える。

「どうしておまえたちが……」

血相を変えて飛び込んできた珠希は、その場に聖と橘香がいることを知って、大きく目を見開いた。

「珠希……ここには来るなど言っておいただろう」

良継に窘められ、愕然^{がくぜん}としていた珠希が異母兄に向き直る。

「お話があるんです。良兄さま……」

「五十嵐^{いがらし}家との婚約の件なら、決定事項だ。私が何と言おうと覆らない。親父^{おやじ}の言うことを聞いておけ」

珠希が言い終える前に、良継が口早に要点を告げた。

頬を紅潮させた珠希は拳を握って反論する。

「あたくしはお断りしたはずですよ……」

「五十嵐が乗り気なんだ。確かに、多少年齢は離れているが、悪い話じゃない」

「ですが」

無理矢理話を終わらせようとする良継と、必死で終わらせまいとする珠希の攻防を、橘香はハラハラしながら見ていた。そこに――

「それでは、僕たちはお先に失礼させていただきます」

「聖さんっ？」

空気をまったく読まない聖の一言に、橘香は仰天する。

「ああ、悪かった。お嬢ちゃんに『影守』もわざわざざあざあとうな。気をつけて帰れよ。……珠希、話は終わりだ」

良継はこれ幸いと、珠希との話まで打ち切った。

戸惑う橘香を聖が廊下に連れ出したのを見計らって、良継も珠希を追い出しにかかる。

「ほら、おまえもさっさと帰れ」

「良兄さまっ」

身をよじつて兄に抗う珠希の鼻先でぴしやりと扉が閉まると、鍵の掛かる音がした。

「っ……」

珠希は悔しそうに唇を噛みしめたまま、うつむく。居たたまれない橘香と違って、聖は何も感じていないらしい。何事もなかったように橘香を促す。

「では橘香さん、遅くならないうちに帰りましょうか」

「でも……あの」

このまま放っておいていいのか。迷う橘香の視線が珠希に注がれているのを見て、聖が声を掛けた。

「珠希さま、ここへは仲塚原の車で？」

「……違うわ」

タクシーで来たと言う珠希に、聖が提案する。

「では、ご一緒されませんか？ 本家までお送りしますよ」

「っ……結構よ！」

珠希の吐き捨てるような言葉にも動じることなく、聖は「わかりました。それではお先に失礼します」と橘香の腕を取って歩き出す。

「えっ……ひ、聖さんっ？ いいんですか？」

振り返ると、珠希が今にも泣き出しそうな顔をしていた。強気な態度が珠希の本心のはずはない。だが、聖は取り合わない。

「ご本人がおっしゃっているのですから、大丈夫でしょう」

「ま……待ってください！」

橘香は慌てて腕を振り払った。どうしてもこのまま放つてはおけない。

橘香は立ち尽くす珠希に、手を差し伸べた。

「もう遅いですし、一緒に帰りましょう？」

しかし、珠希はその手を払いのけた。小気味のよい音が静かな廊下に響く。

「いらなと言ったでしょう！ 余計なお世話だわっ」



じんじんと手が痛む。氣を落とした橘香に、聖が囁く。

「……帰りましょうか」

「はい……」

あまりの頑なさに、何を言っても無駄だと感じた。

橘香が諦めて歩き出そうとしたとき――

「他人のことを心配する前に、身内のことを考えてみれば？」

身内――と聞いて、橘香の足が止まった。その背に、珠希がさらに投げかける。

「随分、偽善者なのね。本当は薄情なのに、氣遣う振りして、いい子ぶるなんて」

「……いったい何のことですか」

偽善者と言われる理由がわからずに、珠希を見つめた。珠希は嘲るような眼差しを向けてくる。

「あなたのお姉さんはここに入院しているのよ？」

「……え」

耳を疑った。

橘香には箏香と鮎香という二人の姉がいた。夏の事件に巻き込まれて鮎香は亡くなり、箏香は一命をとりとめたものの、入院していると聞いた。だが、どこの病院にいるのか、どういう病状なのか、橘香は聞こうとしたことがなかった。

「珠希さま、それは」

「おまえは黙っていて！」

珠希に一喝されて、聖は言葉を飲み込んだ。苦い表情から、それが真実だと悟る。

――姉が入院している。

「迷惑なことこの上ないわ。どうして、仲塚原家と縁もない女の面倒まで見なければならぬのかしら。アレクさまも何を考えていらっしやるのか」

ぶつぶつ文句は続いていたが、もはや橘香の耳には届かない。

「橘香さん」

廊下で立ち尽くす橘香を見かねた聖が「行きましょう」と促してきた。しかし、橘香はその手を払い

のけた。

「珠希さんの言ったこと、本当なんですか」

「ええ……その通りです」

「どうして教えてくれなかったんですかつ」

自分の身内のことなのに、肝心の橘香が排除されていたなんて——どうしようもない憤りを感じた。

しかし、聖の態度は変わらない。

「聞かれなかったもので」

「っ」

淡々とした口調に、毒気を抜かれた。

確かに、聞かなかったのは橘香自身の責任だった。自らの薄情さに唇を噛みしめる。橘香は入院病棟を指して駆け出した。

「ちよつと……橘香さん!？」

背後から聖の声が聞こえたが、無視する。

途中で誰かにぶつかっても、「すみません」と口だけで謝って顔を見る余裕さえなかった。

ようやく辿り着いた受付で、「廊下は走らないで

くださいね」と注意されてしまう勢いだった。

荒い息を整えながら、橘香は尋ねた。

「すみません。あのつ……あ、姉がここに入院していると聞いて……」

「お名前は？」

「新居箒香です!」

受付の女性は困惑した様子で、該当する名前の入院患者はいないと答える。

「そんなはずは……。絶対にいるはずなんです!」

もう一度確かめてくださいっ」

受付に身を乗り出して訴える橘香の肩を、追いかけてきた聖が後ろからつかんだ。

「新居ではなく、掛島かけじまです。掛島箒香さんの部屋をお願いします」

「ああ……一三〇一号室の個室の方ですね。突き当たりを左に曲がった部屋になります」

「ありがとうございます」

受付の女性に聖は丁寧に頭を下げると、橘香の腕

を取って歩き出す。

「あの……どういふことなんですか。姉は離婚したんですか」

橘香と一緒に暮らしていた頃から、姉夫婦を冷めた関係だとは思っていた。表向きの仲は悪くないが、心から愛し合っている風ではない。しかし、箒香は義兄の経済力に惹かれて結婚したと宣言していたため、自分から別れるとは思えなかった。

「やっぱり、あの事件のせいだ」

「橘香さん、落ち着いてください。……実は、新居氏が傷害罪で逮捕されたことが、全国ニュースで流れました。正式な離婚はまだですが、マスコミに騒ぎ立てられなくなかったので、とりあえず旧姓を使わせていただいております」

「……そう、ですか」

義兄は女子中学生や女子高生を好み、出会い系サイトで知り合った未成年を騙して付き合っていたと聞いている。その後、交際相手を妊娠させてしまい、

職場に押しかけてきた少女の腹部を殴って流産させたのだ。

「ここですね」

聖が病室のプレートを指した。最近はプライバシー保護のため、名前を出さないことが多い。ここも部屋番号しか書かれていなかった。

引き戸を開けると、室内は静まり返っていた。ベッドの周囲に巡らされたカーテンをそつと開ける。

「ね——」

姉さん、と呼びかけようとして言葉を飲み込む。

久しぶりに見る箒香は痩せていた。頬はこけ、顔色は血が通っていないかのごとく青白い。腕には点滴の針が刺さっている。

「……眠ってるの？」

かたく閉じた瞼はぴくりとも動かない。何かがおかしい。枕元にある心拍数を示す物々しい機械は何かのなか。

橘香の戸惑いを察したように、聖が囁いた。

「……箏香さんはずっとこのままです」

「え」

それはどういう意味なのかと聞く前に、聖がふたたび口を開く。

「あの事件以来、ずっと意識が回復しないのです」

「そんな……」

聖の言葉が重く心にのしかかる。

知らなかった、知りたくなかった現実を突きつけられて、橘香は何も言えなかった。



第一章

初恋に酔いしれる

十年一昔と言うが、今の橘香には一年はおろか、半年前のことが遥か遠くに感じられる。あの頃は、母を病気で亡くすことも、一番上の姉に引き取られてつらい思いをすることも、ましてや元々住んでいた街から遠く離れた仲塚原市で暮らすことも、思いもしなかったからだ。

放課後、下駄箱で靴を履き替えていると、通りかかった女性教師に呼びかけられた。彼女は橘香のクラスの担任で、行方不明になった前任者の代用教員として、学期半ばに学院にやってきた。

「郡上さん、まだ残っていたの？」

文化祭は一週間前に終わっている。準備のために遅くまでにぎわっていた喧騒も、今では嘘のように静かになっている。

「是枝先生に用事を頼まれました。もう終わりましたから帰るところです」

橘香が教師の御用聞きをしていることを知っている担任は「ああ」と納得する。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。